



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



梅  
美  
海  
集  
三  
編



45  
~遠13  
8241  
8



門へ遠13  
 號 841  
 卷 8

春色梅美の婦ぶね林ね卷之八

江戸

鳥永春水作

第十五回

あつ 船の字を付ふ一うら 林の美屋もとる三十年の暮秋と  
あつ して定初の席直の名を昔のゆと鞠きく 鳥が庭今も  
あつ 多しと梅のゆもあじ秋の舟小舟あつ 涙めある七葉の  
あつ 夜ををんふとて時あつ 夜々あつ 夜色一あつ 好ぶ船の仲あつ 終夜  
あつ 引せしあつ 女の細あつ 小かりしあつ 葉の啼あつ くとまあつ づ用あつ いたあつ ねあつ 舞あつ 狂あつ

明治三六年  
 十月十八日  
 講求

をば水知で入りし平定の物仲を  
夫やア支女も温順と云はれて居成河を一橋今  
まると時後の労きも亦るごらう  
弱り中ごらう私ども今晚うみおの仲や  
ありまご不ヤ夜中ふ冬尻の  
大後ごらけつう儼小怖うご  
なごく降て来る儼小吐く怪後の上ごらう  
肩が細へかつあごご思つこ  
出と流めごらう河のあ小着て冥正小化りの  
思つこ不ヤモ波着ハ条去さんの  
何ご物崇りのでもご私小入へ  
ヤ支ご今おてか一氣味の  
房 不サ不なるを  
仕ハ者手あひ一化お小物崇り  
一橋ののあごの  
此業るぬ小橋を

をば水知で入りし平定の物仲を  
夫やア支女も温順と云はれて居成河を一橋今  
まると時後の労きも亦るごらう  
弱り中ごらう私ども今晚うみおの仲や  
ありまご不ヤ夜中ふ冬尻の  
大後ごらけつう儼小怖うご  
なごく降て来る儼小吐く怪後の上ごらう  
肩が細へかつあごご思つこ  
出と流めごらう河のあ小着て冥正小化りの  
思つこ不ヤモ波着ハ条去さんの  
何ご物崇りのでもご私小入へ  
ヤ支ご今おてか一氣味の  
房 不サ不なるを  
仕ハ者手あひ一化お小物崇り  
一橋ののあごの  
此業るぬ小橋を

うらたせそゆる  
夜は泣き覚るのよと思つて悪夢の見る人の中も出たりのか  
まじりしつる 袖裏の中の 現成庵が 船路として居る  
時分小舟夜船でハ味の悪いふや養ひる子  
見たり出合たりしてそきううあ死の七巻をえんを  
小舟小舟礼らふる河で出立をくささうさう実ハ  
夜中小舟の中小舟居るのハ怖いサントをほしのうち  
ききととをさうり 持来りて平岩の女中「まごき」と  
まを袖の袖ハ出まませんカマとまごきで「ハおとてうら

七巻のつらんお出を控ませ「フヤ着が出来るこの  
まじりしつる 中うらしてめうら「ハテららのつらん  
あの子「そおれさうア不吉小舟とまらう「おあ一人  
おサ「おまえお入る者も小舟さがる麻ふサなくお  
おを坊う 糸房「フヤく七巻とアふお出さるるら  
私をよまうまをヨ何知る他お出を放とあささう  
は知小舟を居ると中とでありまをハ子「たう「西花  
望みの七巻の後刻のふごアナ今ハ小舟のお下居るへ

江戸を喰ふ所のどろろ 役人さぬきをお供して二人  
ゆつて来てその石部令長爺さぬこの令様爺爺さぬで  
のとの山部信俊のそこの悪い旦那方をかまのきん  
おんでおきてお供ふけ方をさぬろ 秋の七草をさぬろと  
いとお供に換てお供のどアナ 房司やくお供さぬいさ  
子へ衆者さん 魚うへお供をさぬいさ 魚ハナクお供  
とさ ともお供しいお供の お供人さぬお供人さんの  
お供十お供いりてお供をさぬて 團るお供してさぬ

お供をさぬてお供さぬハ ナヤお供さぬいさ  
考へお供せ今日ハ大子の お供の旦那方さぬろ  
お供もお供尾をさぬてお供と大衆で 実夫婦  
川のお供さぬ房者さん 奥女がさぬお供さぬいさ  
お供のさぬをさぬいさのどろろ 何卒お供いさ 山積坊を  
お供てお供いさ 房 子やお供さぬいさ へお供さぬお供を  
お供てハナクとお供さぬいさのどろろ 戸唄女  
お供さん 魚さぬお供さぬいさ 私さぬお供さぬいさ





あがう然思ッて 離れて 号ろと 手渡くも 云ふらう私やア  
モウ悔一ムツて 抑も 云らので 峰さんの 徳く 喰け  
泣く 居る 一ツヤ 抑も 別然とツ 先達 文嘉さんの  
咄し 小波と 田舎うう 事とりの 娘の 実正とらうと  
思ふが子 おあ、何とおあ、一ア、夫ハ 遠く 居る  
涙小モウく 哭舞て 伺き みるんども 志と 女で あり  
田舎の 老の 振を いるのと サ 夫と ども 安 秘 伝 切 小  
私 達 と 可 憐 峰 さん が 子 娘 を 内 室 さん 小 して 私 達

をバ 突出 して 望も 構 いると 振 する 不 実 を 仕 する  
まひらと 思ふヨ 一私も 然ハ 思ふが子 方 一 岩 さん の 氣が  
衰ッて 強く 私 達 を 捨る 振 小 成 ころ 何 振 成 ぞ 一モウ  
終る ころ 一私一人 覚悟 して 云ッ 涙 を 眼 小  
うらあ 一おあ まで 見 捨く する 振 小 仕 する ころ 振  
おッて 居て お 呉 一ツヤ 姉 と さん お 岩 振 小 ころ 覚悟 を  
する ころ 一ア ニ 今 不 云 とも 宜ヨ 一 立 夫 ども さん ころ  
私 不 なる ころ 一 理 善 を お 使 せ 成ヨ 一 一ツヤ 姉 と さんを



見捨るうらわの家さんらうバ何れして私をいん持てお  
世法をしてくきまきものう徐亦何れいふるでう姉と  
さんを實出して私をいん後く離別なふ常さんがまね  
とらして何れをそをりふ仕まをのう「ナシくそまハ  
思ひ不考ぶヨ私をいん思ッて居るを今ういふか子  
必もあつくお笑でまのヨ「アヤ何れを「オサ他のるを  
思ッて居るのやういふか子情と考へてあるとこいぬのう  
御ふ私知しくッておあふも後をませるやうなるも

あらう何れあこのを思へバあの人後他人の儀様ふ  
うらうらうと後不後悔ぶヨ亦始終のるを不考して  
君と義理も通い妹の慕ふ男を姉の身とく「退順  
うけト申す不無事ひらう「慕ッてハ海らあんとを  
私不戒て是非お笑にお修のうして私をいん身をして  
常さんを主婦ふも私不仕申すといふん形で居るか  
うらう常さんあひもをを委しくをりておあふのるを  
私わう然思ひてお笑ヨ「アヤ姉とさん何れ故を私を

正 母をお云のどくた物お云のを考へておると私とおあ  
松一峰さんへ對してんを改めるのりまゐるゝとい  
そして姉上さんの免借をまるとお云のハ何れせうと  
お云のどく 兼ハニ何れもお小松思案もあつたママ  
私の不考をハ弟の如く世帯のあつても悪うらうら  
身任ふるらうの中小松さん不別として御意の中  
ゆゑとさくあつてお小松尼主人利て送入して仕  
のサトひひつ房を海の家お房ハとまをさるうのり  
ワット 後出 彼をい小押あて奴のさしとまのびきふ  
後出 彼をい小押あて奴のさしとまのびきふ  
後出 彼をい小押あて奴のさしとまのびきふ

お云のどくらうと推察して恨もさるゝといは  
私と姉姉がうら解くあつたの相違をまると松  
お云のどくらうと推察して恨もさるゝといは  
私と姉姉がうら解くあつたの相違をまると松  
お云のどくらうと推察して恨もさるゝといは  
私と姉姉がうら解くあつたの相違をまると松

お墨の書物の中ふちてあるものの中ふるも出る子  
葉 可ヤおの書い歌を集めて傳法をさすおの中のお  
久 房 一ア、おの子

おらぐると格もほど春乃葉の

り川さう秋おありで左川 産死

葉 一お 考へておつとさうるお格で子下さきさう 唄女とあり

ぬとどえハ医学の娘まで姉ハ成おるもさきとせ 若が

知とていづーくれ

ことよりお葉お房の姉妹が津浪を渡さうまじ  
お糸お出合奇候に編目おありろく若ハせり

第十六回

お雀お屋の種裏を提の下へ立物とバく中葉屋の二三  
お編 葉屋の救るさう中お流を造地ハ仲の所おも  
まさうんき 住居にてまハるんを店先ハハ十七才おりの  
お下女が二人狂送り途ハの葉屋ハを以葉内の中一を  
おとらうとる客人も大守は店おまよるハ娘の密儀 葉屋く





多二何れ一てを極み是れ一正ありもそのきたる者  
まんがおあ極を見しとさうなる世なる物う他目をあんで  
流るるやうみしておをさかそうと者さんもはるる  
中々お月あからむおまさとはい知く傍てお時をり  
まーん一正をきくこと者人書みをしるの  
ていごいしませんまご他知がわりますまごまご  
申しません一コウくおさんおあは物極も海へ入らせ  
あはれ身がまゆの日の約束をしこのみ極まる用が

おまこといつてひつて並てううまよア彼日よ文字  
と彩及の隙通を連く途傍へひまご海やど交を  
よりの文字が大切でござんせういまはそのれでお交合  
申しやせう一アおくおが愛の心をひ出してお交合の  
中をころくしては海まうせん子へ一正くそははは  
ゆぐり〜類ぐり〜きてもうまひのあがあさんの方め  
おの義理のあひゆがわりのまを一アおく何が愛の心  
あのかまこいおあア愛知びサアおの心をあひるせん



「あう〜バ中シ受せむう」 英「イヤハズさうなる足脈ご一々  
先まで二丁目の二階へきて酒具分らうして来  
お方の物嬢を挨拶をいしてきかり思へぬ故軍をうけ  
させらるゝ眼何のせあう私を清めてゆふ返就とせうり  
あふゝコウく備状さうき居のせうふさう不解麻さく  
罪をみかく小仕さうとくわいせをねなるふかしくお入  
知らぬ入「ラヤ〜今日何れ」てもあさんか負でござん  
まもあぶさく私もあるの之解めまごつく処でござんす〜

「ア〜今日ハ大あくあうどト互ふ知の門口をさすも  
何処のう箱の緒とまろくき娘の十ぬ六あるか嬢糸の大  
形の襦袢をききつゝ何の免候とと案中形の綿細をさ  
合せの帯を結ひあうかしてささうり「おあさんお異  
ごうのまも「ラヤおあさん何処にお出でマアおあまヲヤ  
今日ハ例日よううが〜と英藤あうりご子へそきを他人  
迷へせふあ出うけの久「〜さあおあさんごきおねる  
みちをさうて馳ちわア私をささうのまもヨおあさんこそ迷ひ



て人が多くつて鼻でありまはしヨト後ひらきく矢出とてり  
長イヤ何れも矢少女ごお窓さんの中負るの嬢ごせ一ホニ  
場知がうとく云るう結女がはひごう少お窓さんあの  
嬢へ何ごう少や人るサ一ア酒あまさんさ鼻の下を去く  
志て足送る海ふあまの志交あの嬢の窓を空て舞く  
り産んごせ一ホニ自分かその産ごううを産る産産を  
まろのどとらへのの良ごう少何卒ふ易くうう後  
のの良ンリやく本性を産るまのサ一丈ごうて可産ら

志の小窓ひらの嬢ごうう仕方が良一玲方ハあのても  
向のでふ産産ごううト何う産まうぬををりうと産る  
中ふ嬢産お窓の良産産産ををて人を産一をりく  
隣り文ののありと産一産お産も産るお人門人  
イとて一アお窓さん産ををま一今け身中の産をを  
サくくちやくく一ハく先刺産るを産る産る産る  
産るてはまのうと一アヤやく産さん産さん何ごご  
いままお産ひを産るお入ん産るう一ちるま一や







所弘賣

色自然と橋のどくちり二早用ひもろく何橋不荒症の机目も  
将二重縁のこく死手漆うとするのこまび。ゆ死び。そばきて。漆物  
の次。志そのおしも漆うく漆うてうあくまると佳合。物記て粉を  
洗ひろの玉粧多紙より過るあつ。世も白粉と付う粉を。あまもくど  
自他系良の白くうる。死粉よるれ。始由方。余不及奉達。は方だ  
用のひても目に色ばして美くも。紫法ゆ。色。寝ひう。山。ひ。たされ  
真の美人とありまへ。 為永春水精削

髪髪の髪と髪 妙妙案案 初初みみぬぬるる玉玉  
この玉のりい髪と洗ひたの  
申ひりよもうりくも  
そのう有 代三十六文

書物并繪入讀本所 江戸京橋左門町東側中程 文永堂 大嶋屋傳右衛門

